

大学祭「TGUFES2024」開催

東北学院時報

10月・11月合併号

発行

学校法人 東北学院

〒980-8511 仙台市青葉区土樋一丁目3番1号
電話 022-264-6423
FAX 022-264-6478

編集兼発行人 原田 善教
編 集
法人事務局広報部

お電話相談窓口はこちら
大学・大学院 ☎022-

学長室政策支援IR課

(調査依頼・各種補助金) 264-6424

アドミッションズ・オフィス

(受験相談・資料請求) 264-6455

学生課

(学生生活相談・奨学金) 264-6471

教務課

(成績・各種証明書発行) 264-6451

就職キャリア支援課

(求人依頼・就職相談) 264-6482

財務課

(学納金・寄付申込) 264-6441

研究支援課

(公開講座・講演会) 264-6430

大学院課

(大学院相談) 354-8202

中学・高校 ☎022-786-1231

櫛ヶ岡高校 ☎022-372-6611

幼稚園 ☎022-368-8600

ご購入のお申し込み・同窓生の住所変更、同窓会開催のご連絡は校友課へ

☎022-264-6468

振替口座 02240-9-883

十月十四日に五橋キャンパスで「五橋祭」、二十六、二十七日に土樋キャンパスで「六軒丁祭」が開催された。今年のテーマは「spark(スパーク)」。学生たちのアイデアが周りを刺激して火花となり、来場者の心に感動と興奮、きらめきを残したいという思いが込められた。

五橋祭には在学生をはじめ近隣の住民や、同日に土樋キャンパスで行われたホームカミングデーに参加した同窓生などが多数来場。大学祭実行委員長の鈴木一翔さん(法律学科三年)はオープンングセレモニーで、開催に向けて協力を受けた関係者に感謝の言葉を述べ「来場者の笑顔がスパークする」とはもちろん、大学祭の開催によって両キャンパス周辺の地域を盛り上げ、日頃の感謝を伝えたい」と語った。

なつた押川記念ホールでは、お笑いサークル「みちのく」による漫才や、居合道部の迫力ある演武、スペシャルゲストを招いた音楽ライブとトークショーが会場を沸かせた。講義棟と研究室が日頃の研究成果を発表したほか、子どもから大人まで楽しめる体験型ワークショップを用意し、中でも巨大迷路は特に人気を集めた。学生食堂とTGUコートでは、地域との交流イベント「わが街マルシェ」も開催された。三回目となる今年も、荒町商店街、連坊商興会、むにやむにや通り商店街などから二十店舗以上が出店。大学との連携をさらに深めた。



五橋祭の熱気をそのままに迎えた「六軒丁祭」では、初日に恒例の仮装パレードが行われ、大学旗を掲げた応援団とチアリーダーが活躍した。



五橋祭は、学生をはじめ近隣の住民や、同日に土樋キャンパスで行われたホームカミングデーに参加した同窓生などが多数来場。大学祭実行委員長の鈴木一翔さん(法律学科三年)はオープンングセレモニーで、開催に向けて協力を受けた関係者に感謝の言葉を述べ「来場者の笑顔がスパークする」とはもちろん、大学祭の開催によって両キャンパス周辺の地域を盛り上げ、日頃の感謝を伝えたい」と語った。



今年度の大学祭は、五橋キャンパスと土樋キャンパスの特徴を十分に活かし、それぞれの魅力を発揮。学生だけでなく、地域住民や同窓生も巻き込み、大学と地域社会が一体となって作り上げた、活気あふれるイベントとなった。

第23回東北学院ホームカミングデー

10月14日、ラーハウザー記念東北学院礼拝堂で、第23回東北学院ホームカミングデーが開催された。

同日には五橋キャンパスで大学祭「五橋祭」が開催され、来場者のほか、多くの同窓生や学生、教職員らが土樋キャンパスに集まった。イベントは原田浩司宗教学部長司式の記念礼拝から始まり、続く記念式では大西晴樹院長・学長が、各設置校の進学状況などに触れつつ、今回企画されたトークセッション「東北学院のスポーツを通じた中高大教育をどのように進めるか」を受けて「東北学院はキリスト教による人格教育を基礎としていますが、スポーツにおいては勝つ喜びを教えるべき」とスポーツを通じた教育の重要性を話した。

森山博同窓会長からの祝辞の後、続くトークセッションでは大学硬式野球部の星孝典監督、中学校・高等学校の帆足直



治校長、櫛ヶ岡高等学校の河本和文校長が登壇。坂本讀大学学生部長がファシリテーターを務め、運動部の近況報告をはじめ、指導やトレーニングの変化、スポーツを通じて育む人間性、合同練習や指導者間の意見交換の必要性などについて意見を交わした。

今回のホームカミングデーは、同窓生が母校に再び集い、学生や教職員と交流を深める貴重な機会となり、スポーツを通じた教育について改めて考えるきっかけともなった。



聖書のこぼれ
それゆえ、あなたがたのゆえにシオンは煙と成り、耕されエルサレムは瓦礫の山となり、神殿の山は木の生い茂る高台となる。

三力書三章一二節

改革の伝統

東北学院はキリスト教の学校ですが、その中でも改革派という流れの中にある学校です。改革派という名称は、英語ではReformed Churchと書きます。能動形で「改革する」という意味のReformingではなく、受動形で「改革される」という意味のReformedです。つまり、我々自身が変わらなければならないのです。

我々自身が変わらなければならない、ということ。実は旧約聖書以来の伝統です。いまから二千七百年前に、ミカという預言者は、当時の変わらぬ人々、腐敗した政治や教団に向かって、大變革の言葉を投げかけました。当時の為政者たちは、不正によって、正義を押し付けました。しかも抑圧しているときに自分たちを正当化するために用いた言葉が、よりによって神だったのです。神が私たちにいるから大丈夫なのだと思いついていた当時の為政者たちは口々にこう言っていたとミカは告げています。「主が私たちにただ中におられるのではないか。災いが私たちに及ぶことはない(ミカ三・一二)。こうして、神の名を乱用し、神の名の下に正義を曲げた人々に対して、預言者ミカは非難の言葉を投げつけました。

その言葉の中で、実は特に強烈な意味を持っているのは、「この箇所の最後の言葉です。『神殿の山は木の生い茂る高台となる』。ここで高台と訳されている言葉は、単に高い場所にある地形という意味ではありませぬ。ミカの生きている時代と同じくその少し前「高台(バモト)」というのは、異教の神の祭壇を指す場所でした。

つまりこういうことになりました。人々が神を自身のための道具として用いるなら、神は自分が崇められるはずの神殿すら壊してしまうのです。神がご自分の神殿すら壊してしまうとはどういうことでしょうか。それは、「神とはこういうものだ」という人々の思い込みを砕き、人々を変えるためには、神ご自身が率先して変わる姿を見せてくれているのだということです。そうして、その行き着いた先が、イエスの十字架の出来事でした。イエスの十字架は、「神はこのようなものだ」という我々の思い込みの正反対のところにあって神の姿を示しているからです。

変化していく中で、私たちがいろいろ失敗も経験するでしょう。しかし失敗したと認めたとく、少なくとも自分が自分を変えようとしたことは確かです。失敗に向き合っていてこそ、自分を変えていくことができるのです。

大学宗教学主任 田島 卓